

千葉大学学術成果リポジトリ(CURATOR)は、千葉大学内で生産された電子的な知的生産物(学術論文、学位論文、プレプリント、統計・実験データなどの学術情報)を蓄積、保存し、学内外に公開するためのインターネット上の発信拠点です。

『千葉医学雑誌』の創刊からの論文が CURATOR上で閲覧できるようになりました！

千葉医学会から刊行されている『千葉医学雑誌』は、発行とほぼ同時にCURATORに登録され、千葉医学会webページの雑誌目次からのリンクやCURATOR上での検索により、最新号の本文も閲覧することができます。またバックナンバーの遡及登録も進められ、この度 前身誌として明治28年に創刊された『一高志林(1895-1901)』から、『千葉医学専門学校校友会雑誌(1901-1915)』『千葉医学専門学校雑誌(1915-1922)』『千葉医学会雑誌(1923-1973)』を経て『千葉医学雑誌(1974-)』まで、ほぼすべての論文がCURATORから閲覧できるようになりました。

約120年近い歴史を刻む資料の登録完了を機に、千葉医学会会長の中谷晴昭教授・医学部長医学研究院長と、千葉医学雑誌副編集委員長の瀧口正樹教授、亥鼻分館長の清水栄司教授にお話を伺いました。

インタビュー

—— まずは創刊から最新号までの論文が公開されたことについて、ご感想をお願いします。

千葉医学会の歴史は90年ですが、千葉大医学部は前身の共立病院の設立から数えると今年で138年になります。『一高志林』から現在の『千葉医学雑誌』まで、千葉大学の教員や学生をはじめ、卒業生や関連病院の医師、医療従事者の論文などを掲載してきました。

今は学会誌や専門雑誌は数多く出版され、研究成果を発表する場も様々がありますが、昔は学会会の発行する『一高志林』が教員、学生、卒業生が互いに診療、研究などから得た知識を共有する場でありました。

先進的な知見に加え、歴史を紐解き、そして歴史から学ぶことも我々には多くあります。『千葉医学雑誌』に発表された論文が創刊から現在までCURATORに登録されて、オンラインで誰でも読むことができるようになったのは大変意味のあることだと思います。



中谷教授



瀧口教授



清水教授

—— 『一高志林』第1号に、筒井八百珠氏による『紅斑性狼瘡』の論文が見られます。

紅斑性狼瘡は自己免疫疾患の代表的なものですが、これは臨床講義の記録ですね。その症状の紹介や、処置の方法などを講義したようです。免疫学は、現在でも千葉大学の医学研究の柱のひとつとなっており、この雑誌の最初の論文が免疫関係だったことは偶然にしても歴史的なものを感じます。



筒井八百珠教授

—— 千葉医学会の事務局を担当されている高橋薫さんに、『千葉医学雑誌』を公開する実務についてお話を伺いました。

千葉医学雑誌ホームページでは、各号の目次ページからCURATORに登録済である各論文のファイルにリンクをはっています(79巻-最新号まで)。

CURATORへの論文登録は、概ね事務局で行っていますが、各論文(原稿)毎に、手元にあるテキストデータからタイトルや著者名などをコピー・ペーストし、最後にPDFファイルをアップロードするだけで登録できます。高度の専門知識を必要とせず、簡単に作業を進めることが出来るので助かります。

また、万が一、誤って登録してしまった場合でも、担当の方がきちんとサポートしてくださるので大変心強いです。

その他、CURATORに登録されていることにより、過去に掲載された論文の検索が名前・タイトル等で容易に行なえることも魅力のひとつだと思います。

ご利用は千葉医学会のwebページから。 <http://www.c-med.org/>



発行年	巻	1	2	3	4	5	6
2012	88	1	2	3	4	5	6
2011	87	1	2	3	4	5	6
2010	86	1	2	3	4	5	6

—— 2008年以降に最もよくアクセスされている『千葉医学雑誌』の論文は、宮下智大ほか『頸椎性神経根症に対する治療』84(2), 61-67, 2008 でした。

こうしたレビュー（総説）は、研究内容がコンパクトにまとまっていますので、たしかによく読まれる論文です。その他には各研究分野の例会や集談会が行われる「千葉医学会例会」の記事がよく読まれているようですね。例会の内容について千葉医学会に問い合わせが来た時には、CURATOR上の記事を読んでいただくよう案内しています。

ただ、研究者としてはアクセス数だけでなく引用回数が気になる場所です。一般に、引用される回数が多いことは論文が評価されていることと考えられますので、特に日本語論文の引用回数を効率よく調査できる方法がないことが残念です。

『千葉医学雑誌』では、これまでも日本語論文にも英語のアブストラクトをつけるなど、海外のデータベースに登録されるよう工夫と働きかけをしてきました。2011年にはB5からA4に判型を変え、表紙デザインも一新しましたが、さらに2012年発行の88巻から、英語論文には別の通しページを付与することで英語論文だけまとめて雑誌としての体裁が整うようにしました。海外のデータベースに採録されたり※、掲載論文がより引用されやすくなることを願っています。

※ Elsevier社のSCOPUSにて、Chiba Medical Journal (=千葉医学雑誌)の1962-63年, 1974-89年, 2008年以降が登録され、検索対象となっています。

—— 千葉医学会では『千葉医学雑誌』の出版以外にどのような活動をされていますか？

千葉医学会賞という中堅の研究者を対象とした学術賞を設けて、基礎系・臨床系研究者を毎年1名ずつ表彰し、賞金を授与しています。

他に若手研究者向け（35歳以下）には奨励賞もあり、学部生、医学薬学府大学院生、本会会員の中から計3名を表彰しています。学部段階でも早くから研究をしたいと希望する学生がいますので、毎年成果発表（ちばBasic and Clinical Research Conference）を行う中で最優秀者に奨励賞を授与しています。

診療を行う上で「考える医療」を実践することは非常に重要です。個々の患者においては生活環境等が違い、症状の現れ方も異なってきますので、その方に合ったベストの医療を考えるためにも、論文を批判的に読む、自分の実験を元に論文の背景を考えると研究の過程で得られた経験が役に立つのです。卒業生には「人生の中で一度は自ら研究を行うことを経験してください。それをしないと、中途半端な医師で終わる可能性がありますよ」ということを必ず言っていますが、研究を奨励するためにも、こうした賞を設けています。

その他には、附属図書館玄鼻分館の古医書を電子化する活動のサポートも行っています。千葉大学医学部は全国屈指の歴史を有する医学部ですので、その歴史的遺産を後世に伝える責任があると思っています。

—— ところで、普段はどのように論文を探し、利用されていますか？

文献検索は医学分野ではやはりPubMedを主に使用します。キーワードで関連研究の論文を簡単に検索できるだけでなく、自分の名前前で検索して論文リストの代わりにすることもよくあります。論文は電子ジャーナルで読むことが多いですが、発行される雑誌が増えると全部を契約することはできませんので、アブストラクトまでしか読めない論文が増えている気がしてしまいます。

電子ジャーナルで読めないものでも、機関リポジトリを探せば見つかるかもしれませんが、検索方法も一様でなく、残念ながらあまり利用していません。また、出版社版の掲載ページを紙面上で確認できないため、引用する場合にはやはり出版社版が必要になってしまいます。いずれ機関リポジトリでも出版社版の公開を認める雑誌が増えて、そういった雑誌でないと投稿もされなくなる時が来るのかもしれませんが、もう少し時間が必要ですね。

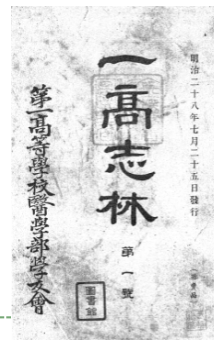
—— ありがとうございました。

—— 千葉大学では『一高志林』の第1号を所蔵していないため、電子化にあたっては金沢大学附属図書館医学系分館で所蔵している『一高志林』をお借りしました。金沢大学附属図書館の当時の担当者の橋 洋平さんにもお話を伺いました。

『一高志林』の創刊部分をCURATORに登録するために、本学医学系分館の所蔵分を借用させて欲しいという依頼を受けたのは2009年度のことでした。他大学の所蔵資料を登録することは、例外的なことだと思いますが、ここはデジタルリポジトリ連合※などの活動を通じて、大変横の連絡の良いリポジトリの世界です。快く本学所蔵分をご利用頂くことにしました。

本学は、「旧六」と呼ばれる官立医科大学としての歴史を持つ点で千葉大さんと共通しています。さらに、千葉医学会に当たる学会として十全医学会という学会を持ち、その学会誌『十全医学会雑誌』の電子化と機関リポジトリへの登録を進めている点でも共通しています。ただし、本学では、医科大学時代から所蔵している資料の電子化は進んでいません。今後は、電子化作業のノウハウの共有といった点でも協力していけるとありがたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

※ 機関リポジトリやオープンアクセスに関する情報共有を行う緩やかな連合体



CURATORは、今後もこのような学内の貴重な研究教育成果を保存・発信していきます。研究成果のご提供・登録に関しては、CURATOR担当までお気軽にご相談ください。

登録申請・ファイル送付・お問合せ： 情報部学術情報課 CURATOR担当

tel:043-290-2253, fax:043-290-2255, ir@office.chiba-u.jp